



# 営農情報

第69号 平成30年 3月9日

## 「あまおう」3月の管理

南筑後普及指導センター  
福岡大城農業協同組合

10a 当たり収量 5 t 以上を目指しましょう

農薬使用の際にはラベルや袋に記載されている適用作物などの登録内容と有効年月を確認してください。

### 1 生育状況

2番果房は、低温でやや遅れて早期作型で2月上旬頃、普通作型で2月中旬頃から収穫が始まり、2月中旬から下旬にかけて2番果房の出荷が多くなりました(図1)。

3番果房の出蕾状況は、早期作型は昨年度よりやや早く、普通作型は過去2か年と比較してやや遅くなっています(図2)。

病害虫については、ハダニ類やアブラムシ類、うどんこ病の発生が増加しています。

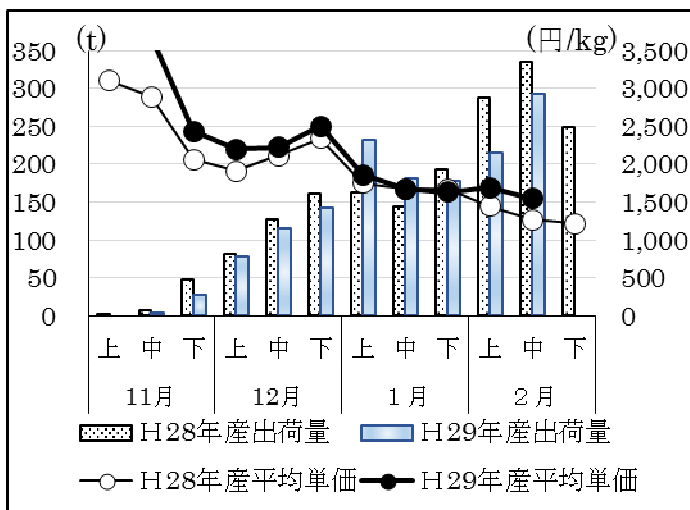


図1 南筑後普及センター管内のイチゴ総出荷量と平均単価の推移

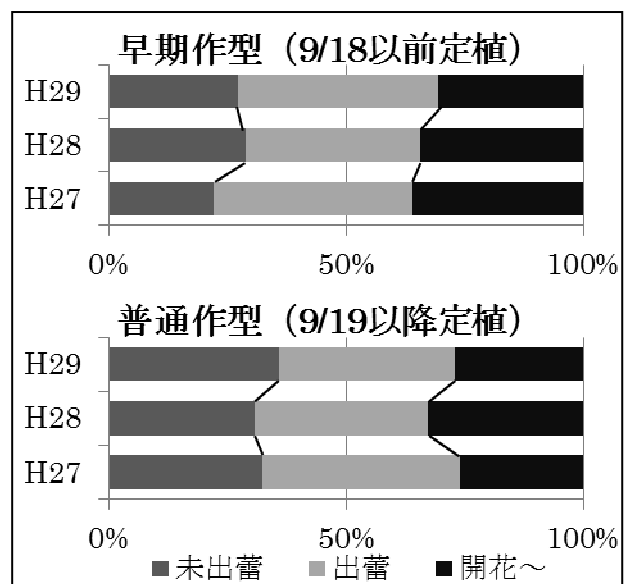


図2 3番果房出蕾状況(調査期間:1/30~2/6 南筑後普及指導センター管内)

### 2 気象予報と今後の見通し

#### (1) 気象予報

福岡管区气象台が発表した1か月予報は下図のようになっています。

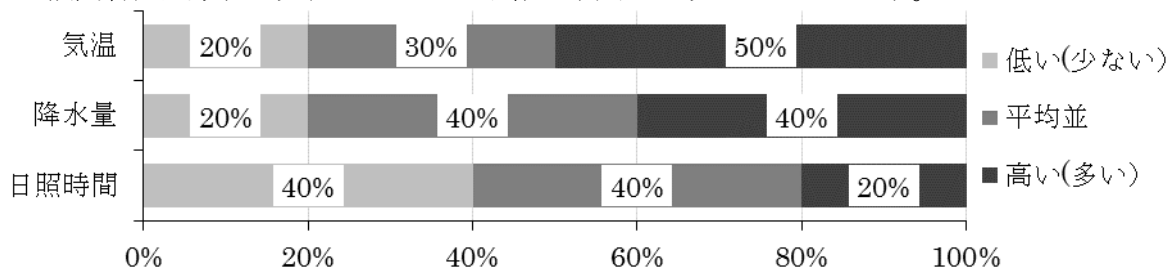


図3 1か月予報 (九州北部地方 予報期間: 3月3日~4月2日 発表日3月1日)

#### (2) 今後の見通し

天気は数日の周期で変わり、平年に比べ晴れの日が少ない予報です。平均気温は、平年より高い確率が50%で、降水量は平年並み、多い確率がともに40%です。急な株の立ち上がりや灰色カビ病・ハダニ類・アザミウマ類の発生が懸念されます。ハウスの換気に気をつけ、病害虫の早期発見、早期防除を心がけましょう。

### 3 今後の管理

#### <ポイント>

今年度の2番果房は早進株もみうけられ、低温・日照不足の影響もあり、2番果房の収穫の遅れが見られましたが、連続して3番果房が出蕾していて、3月の気温上昇にともない養分競合や果実肥大不足が懸念されます。果実の傷みを出さないためにも2番果房の果梗枝の除去や3番果房の摘果を速やかに行いましょう。

#### (1) 温度管理

- 日中は、サイド・谷・妻面を開放して換気を行い、低めの温度管理を行う。
- 夜温7℃以上の日は、夜間もハウスを開放したままにする（雨天日を除く）。

表1 3月以降の温度管理の目安

午前	午後	夜間
18℃～20℃	18℃以下	5℃（夜温7℃以上は開放）

#### (2) 電照管理

- 草勢を見ながら徐々に電照時間を短くし、3月中下旬を目安に心葉の展開が外葉より高くなりかけたら終了する。
- 電照終了後、心葉の伸びが悪くなった場合や、展葉速度が極端に遅くなった場合は電照を再開する（2時間程度）。

#### (3) かん水

- 少量で回数を多く行う（1回当たりのかん水量が多いと、収穫時の果実傷みの原因となるため）。
- かん水の目安は、pF値1.7～1.8とする（朝、葉つゆをうたないようであれば土壌が乾燥している）。
- 果実品質維持のため、収穫直後に行う。
- 水分不足は、果実肥大不足や乾燥によるダニ類の多発要因となりやすいので注意する。

#### (4) 施肥

- 液肥は、窒素成分で1か月当たり1～2kg/10aを2～3回に分けて施用する。
- 3月末を目安に施用を終了する。

#### (5) 株整理

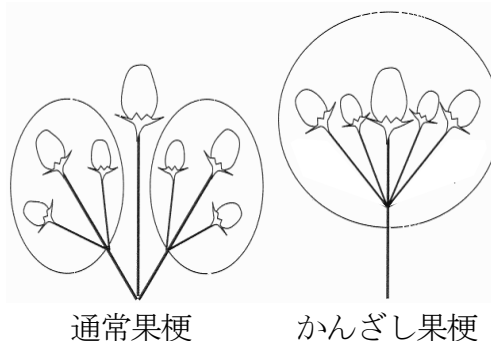
- 収穫が終了した果梗は、傷果防止と次果房の出蕾促進のため速やかに除去する。
- 枯葉や黄化した葉のみを除去し、一気に葉を除去しない。

#### (6) 摘果

- 3番果房の摘果は、果梗の形に応じて行う。また、草勢が弱い場合（心葉の葉柄長9cm以下）は着果数を減らす。

#### 【 1枝当たりの着果数目安 】

通常果梗：3果/枝
かんざし果梗：4～6果/枝



通常果梗      かんざし果梗

図4 果梗形状に応じた摘果

## (7) 炭酸ガス施用

- ・換気が頻繁にされるようになると、炭酸ガス施用の効果が小さくなる。
- ・日中ハウスを開放する時期（3月中下旬）を目安に施用を終了する。

## (8) 病虫害防除

### ① ハダニ類

- ・下葉の除去後、葉裏や葉縁に十分薬液がかかるように丁寧に散布する。
- ・ハダニの多発した株は、特に強めに葉かぎをした後に防除をする。もしくは株ごと除去してハウス外に持ち出す。
- ・葉かぎしたあとの残渣は、ハウス内に放置しない。  
気門封鎖型薬剤の卵に対する効果はほとんど無いため、気門封鎖型薬剤は5～7日おきに複数回（2～3回）散布を行う。

### ② アザミウマ類（スリップス）

- ・発生が少ないうちは、IGR剤（マッチ乳剤、カウンター乳剤等）で防除し、多発した場合には、スピノエース顆粒水和剤、アーデント水和剤、ディアナSC等を用いて防除する。但し、天敵やミツバチへの影響が大きい薬剤もあるため注意する。
- ・ハウスの換気時間が長くなると、外部から飛び込む可能性が増加するため、特にサイド側や妻面付近の株に注意する。
- ・ハウス周辺の雑草からハウス内に侵入するため、ハウス周辺の除草を行う。

### ③ アブラムシ類

- ・発生が見られており、今後、気温上昇と共に増加する。油滴状の排泄物や幼虫の白色の脱皮がらが付き、果実の汚れなどにつながるため発生に注意し防除する。

### ④ うどんこ病

- ・夜温が上昇し、生育が軟弱徒長気味になると発生が多くなる。
- ・電気加熱式くん煙器や、定期的な薬剤散布による予防に努める。

### ⑤ 灰色かび病

- ・多湿条件で発生が増加するため、曇雨天の前などは予防的な薬剤散布を行う。
- ・発病後は、早急に被害果実を取り除き薬剤による防除を行う。

## (9) 親株の管理

### ① 病虫害防除

- ・下葉の除去後、炭そ病とハダニの防除を行う。
- ・ランナー発生前から7～10日に1回を目安として薬剤散布を行う。

### ② かん水・施肥

- ・ランナー発生期の4～5月に乾燥すると、採苗時期の遅れや採苗本数不足の原因となるため、事前にかん水施設を準備する。
- ・プランターやポットは乾燥しやすいため、こまめにかん水を行う。
- ・プランターやポットの場合は、4月上旬までにIB化成S1号を1株あたり10粒、5月上旬までに1株あたり5～10粒の追肥を行う。

### ③ その他

- ・土耕ほ場では排水対策用の溝を必ず整備する。

**農薬の安全使用と飛散防止対策を徹底しましょう！**

# 特集「イチゴの萎黄病に注意!!」

近年、萎黄病が増えています。萎黄病はフザリウム菌による土壌伝染性の病害であり、発生ほ場では次作での発生リスクが高いため、防除の徹底が必要です。来作での発生を防ぐためにも、対策を徹底しましょう。

萎黄病の病原菌は孢子によって土壌伝染し、発芽して根から侵入し、導管部を侵します。また、罹病した親株からはランナーの導管部を伝って苗に伝染します。

感染株は次第に生育不良になり、葉は小葉の1～2片が小型化やねじれ等奇形化します(図5)。葉は黄化、矮化し、激しいときは株全体が枯死します(図6)。このような株はクラウンを切断すると導管部に褐変(図7)が見られます。



写真1 奇形化した小葉

## 1 病気の特徴

- ・ 発育適温は28℃で、25～30℃で発病が多い。
- ・ 22℃以上では、発病が早く被害が著しく、25～30℃、激発して枯死株が続出する。
- ・ 自然土壌中では、休眠状態で4～5年以上生存できる。
- ・ ポットなどの資材に付着した土壌によっても罹病する。

## 2 防除のポイント

### ① 親株管理

- ・ 前年度に発生した場合は、親株を更新する。
- ・ 高設採苗で発生した場合は、資材(プランターやポット)をケミクロンG等で消毒をする。また、プランターで使用する培土を更新する。

### ② 育苗管理

- ・ 育苗期間中にベンレート水和剤(500倍、50～100ml/株)を灌注し、予防に努める。
- ・ 発病株や感染の疑いがある株は、早急に取り除き、ほ場外で処分する。

### ③ 本田管理

- ・ 発生ほ場では、作付け終了時に植物体をできるだけほ場から持ち出し、太陽熱消毒やクロルピクリン等の薬剤により土壌消毒を行う。
- ・ 定植後の防除対策はできないため、発病苗(感染が疑わしい苗)を持ち込まない。
- ・ 発病株や感染の疑いがある株は、早急に取り除き、ほ場外で処分する。



写真2 萎黄病による枯死株

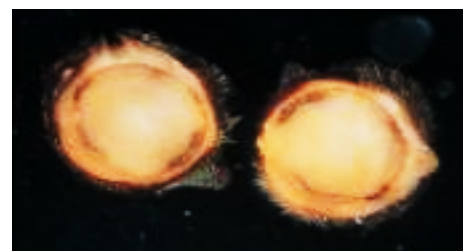


写真3 導管部の褐変